

「本講」から「第09講」まで、「品詞」の拡大、すなわち、「句」「節（『文。』の転換）」を学習します

第06講 「前置詞」なんて空疎な呼称はやめて、『成句詞』+「後属役名語句」=「形容句か副句』でいくべし！

（「前置」って何の前に置くの、「名詞」っていうわけ、で、だから何が起こるの・・・）
本書では、「前置詞」という形式的で空疎な品詞名をやめて、「形容句」または「副句」をつくるという実質的役割に着目してあらたに命名し、「成句詞」とよびます

いよいよ、「単語」のレベルを離脱して、「複数の単語による意味のあるまとまり（語集団）」すなわち「句」「節」のレベルに入って、「品詞」が拡大していきます
英語の「構造」がどんどんわかってきて、楽しくなりますよ（「複雑高度化の実感！」）

本講では、「句」についてみていきます（「名句」は「第04講」参照）

「句」ってなんですか・・・、からはじめましょう

表現を拡張させるために、ふたつ以上の単語を連携させて、「1単語」ではあらわせない複雑高度な意味を、単語の集団で新たに作り上げていくのが「句」です

「句」は、ほとんどが「成句詞（前置詞）」によってつくられます

「成句詞」による「句」は、「意味のあるまとまり」として、「形容詞」か「副詞」としてしか働きません（「名句」の代用の場合もありますが、稀有です）

「句」による「形容詞」「副詞」ですから、「形容句」「副句」と呼びます

ある「状態」「状況」が1語の「形容語」「副語」であらわせないような場合は、「成句詞」を使って、複数の単語を連携させて、新たな「形容詞」「副詞」をつくっていくのです

例えば、「今夜に」は「tonight」の1語の単語がありますが、「朝に」は1語の単語がなく「in the morning」の3単語による「句」であらわし、「成句詞」が必要なのです

また、使い慣らされているせいか、「成句詞」が消えてしまっているものもあります
例えば、「every day」「last year」などがそうです

このような場合は、一見、ただの「名句」に見えてしまうので、注意が必要です

成句詞

成句語（前置詞）

成句句（群成句詞）（群前置詞）

複数の単語が集合して、一語の「成句詞」として働いている場合もあります（群成句詞）

「後属役」「後属語」「後属句」とは

「成句詞」が「支配」している「名詞」を一般には「目的語」といいますが、「他動詞」の「目的語」と「同名」で、両者の呼称が同じなのは紛らわしく、別の呼称が望ましいので、「後属役」「後属語」「後属句」とでも別に「命名」するのが合理的だと思います（「属」の字に注意、「成句詞」の「後ろ」で「従属」しているのです）

「形容句」「副句」でも、その働きは1単語の「形容語」「副語」と同じです

「成句詞」＋「後属役名詞」	「形容句」	「名語修飾」をする
		「補役」になる
	「副句」	「副詞三原則」が該当

① The girl in our class is very pretty.
中心主語 形容句 後属語 自 形補
主 役

② The girl plays soccer in that park.
副句・場所 後属語

①は「名詞修飾形容句」で、②は「副句」の例ですが、「形容句」か「副句」か曖昧で、どちらとも解釈できる場合もあります

次の『文。』は要注意です

③ The girl is in good condition.
形容句の補役

この場合、「in good condition」を「よい状態の（場所に）」、「いる（is）」と状況的にとらえるよりは、「よい状態」「である」と、「状態・性質」をあらわす「形容句の補役・補句」と考えたほうが自然でしょう

（「1単語」の場合は「補語」で、「句」の場合は「補句」で、両者をあわせて「補役」と総称します）

このように、「形容句」が「補役」として働く場合もあるので、注意してください

The cherry trees are in full bloom .
この英文を実感できますでしょうか

《「成句詞」＋・・・＋「後属語（句）」》

「成句詞」を見つけたら、確実に「後属語（句）⇒名語（句）」を抑えてください
「成句詞」と「後属語」の間には、多くの「後属語を修飾する形容詞」やその「形容詞」を修飾する「副語」がある場合が多いです

それらの、「役外族」に惑わされずに、「後属語」を認識してください

「成句詞」には「○」を付け、「後属語」には「」を付けたりするとよいでしょう（くれぐれも・・・「後属語（句）」は「名語（句）」です）

《「成句詞」＋・・・「副詞」「形容詞」・・・＋「後属語」＋「形容句・形容節」》

さらに、「後属語」の後ろには、その「後属語」を修飾する次なる「形容句」や「形容節」がくっついていたりします（「形容節」は後述します）

これらの、「形容句」「形容節」は「後属語」に吸収され・消滅する運命で、「後属語」とは一体ですから、《「成句詞」＋・・・＋「後属語」＋「形容句・形容節」》で、どこまでが「成句詞」に支配された「まとまり」なのかを確実に認識してください

「with a deeply mysterious girl whom I met at the snow festival」
という例句をあげておきますが、習得は「基礎的英文読解」時で十分です

「前置詞」は、その性質からして、「成句詞」と命名されるべきものだということがおわかりいただけたでしょうか

そして、「look at ～」のような「自」＋「副句」を「熟語」というのはもうやめましょう

補足です

「群成句詞」（「群前置詞」）

厳密に言えば、「成句詞」というものに関しては、通常は1語のものを前提視しているのが一般で、その点で、「成句語」というべきでしょう

しかし、たまたま一語の「成句語」が無かったり、1語の「成句語」では示せない（複雑高度な内容を表したい）場合等は、数語で1語の「成句詞」と同様の役割を果たさせます（論理的には「成句句」ですが、「群成句詞」ともよびます）

例えば、「in front of」です

これ以上品詞分解をしても効用はないので、1語の「成句詞」のように扱うのです
その他には、「out of」「because of」「up to」「thanks to」「as to」「by means of」「in spite of」等が有名です
これらは、一語の「成句詞」のようなつもりで覚えてしまうのが得策です

次講以降では、「句」を越えて、『文。』をまるごと、「名詞」化・「副詞」化・「形容詞」化してしまう様子を見ていきましょう・・・すなわち、「節」の学習です

(以下は、「ここで理解できたらホンモノ」という、「文法マニア」向けの記述です)・・・通常一般人は、回避してください
さらに、発展的補足です(今は読み流し、「第12講」終了後に戻ってきてください)
以下に示す、「o f 形容句の構造的由来」は、今の段階では少し難しいかもしれませんが、本書は「理解可能な順での理解の積み上げ方式での講義形態」をとっていますので、「第12講」あたりまで終了したら戻ってきて再読すれば容易に理解できるはずです(関連性から「句」をテーマにした本講で補足しましたが、本補足の完全理解のためには「第12講」までの理解が必要かと思われますことをご承知おきください)

「o f 形容句」の「構造的由来」

『 B o f A 』という形態の場合、

、
「o f A」は「形容句」で「修飾句」であり、「B」は「被修飾語句」です

「A」も「B」も「名語句」しかありません

「名語句」は「主語句(主役)」「目的語句(目的役)」「補語句(補役)」「後属語句(後属役)」にしかありません(「主役」「目的役」「補役」については、「第09講参照」)

ここで、『 B o f A 』という形態には、「元の『文。』」というものがあり、その「名詞化」であると考え、A」には、「主役由来」「目的役由来」「補役由来」の三種があるので

特に、「補役由来」は「同格」と考えられます(「第07講」「第12講」参照)

ここで、辞書を引いて、「主格のo f」「目的格のo f」を丹念に検討し、≪「品詞」の転換(派生語)による『文。』の名詞化≫を認識・理解してください

以上の考え方は、「名詞構文」といわれているものの基本思考です

「名詞構文」という項目(講目)は、難しいイメージでぶち上げられ、一部では儲けのネタになっているようですが、ごくごく簡単なものです

「名詞構文」といわれているものの本質は、「『文。』の名詞化」(「第07講」「第09講」や「第12～14講」参照)のひとつであり、「『文。』の名詞化」という大きな視点のもとで、①「『文。』まるごとの名詞化(「第07講」参照)」②「不定詞による『文。』の名詞化(「第11講」参照)」③「分詞による『文。』の名詞化(「第12講」参照)」に続く、④「品詞の転換(派生語)を伴う『文。』の名詞化」に過ぎないので

(ですから、「第12講」が終了した段階で、本補足に戻ってくれば、容易に理解が深化します)